



世界とつながる教室

昨年、ASEAN諸国から22人の学生が来日した時には1泊2日の交流合宿を実施。それぞれの国が抱える問題について意見交換した。「地球市民として、何が出来るかを常に考えてほしい」と石森先生(右)。「被災地の高校として、今回の震災を授業に取り入れていく意義は大きい」とも話す

“グローバル”な教室から羽ばたく

東北地方の中でも特に、国際交流や国際理解教育に熱心に取り組んできた宮城県仙台東高等学校。日々、世界とつながる大切さを実感しながら、多角的な視野を持った生徒が育っている。



国際理解活動に積極的な英語科の大井彩花さん、佐藤郁美さん、清水のかさんらが「STAND UP TAKE ACTION」※を全校生徒に呼びかけた。60人以上の有志が参加し、貧困撲滅を願って立ち上がった。写真に石森先生のクラスの生徒たち

教室の一角には、世界の問題を意識できるような掲示スペースがある



グローバルなものを見方は、はぐくむ石森先生の授業

「携帯電話の部品は、アフリカのコンゴから来ているの？」

「シエラレオネって、平均寿命が34歳なんだって…」

「あ、このお菓子にもパーム油が入っている！」

仙台駅から海岸に向かって約7キロ、仙台市若林区にある宮城県仙台東高等学校。英語科3年生の教室では、よくこんな会話が飛び交う。生徒たちにとっては、遠く離れた国で起こっていることは、自分たちの問題なのだ。



普通科の授業でも、教科書の内容をグローバルな問題に絡めて生徒の関心を喚起する

世界とのつながり。そして3月11日の東日本大震災後、彼らは、つながることの大切さを、実感した。家族と数日間連絡が取れなかったり、家が津波で流されてしまったり…、それぞれが大変な状況にあった。しかし、「家が全壊して、人生で初めて絶望感に襲われました。でもそんな時に心の支えになったのは、同じ境遇で協力し合う地域の人たち、世界中から届いた支援や励ましの声でした」と奥田さん。また、「電気が復旧してパソコンを開いたら、たくさんメッセージが届いていたんです」という齋藤敦史くんは、これまでの国際交流で知り合った海外の友人からの連絡に、うれしくて涙が出そうになったという。今回、助けてくれた人たちに恩返ししたい。彼らはそう口をそろえる。「失われた命も多いい中、私たちは今こうして生きています。先を見て頑張っていくことが義務だと思っ

ています」と、小嶋ゆみさんは力強く話してくれました。

彼らは立ち止まったりはいない。石森先生の「グローバルな教室」から、たくましく羽ばたいている。

仙台東高校は「日本と世界のために貢献できる人材の育成」を目指し、アジアからの留学生の受け入れや国際協力経験者による講演会の開催などに力を入れている。中でも英語科では、3年間を通じて国際理解教育を展開。単に英語ができるだけでなく、地球上で起こっている問題について学び、英語をツールとして、世界の人々と協働して頑張っていきたいという願いが込められている。

英語科3年生の担任は石森広美先生。1年生の時からこのクラスを担当している石森先生のことを、生徒たちは「先生がいる空間すべてが国際理解の授業」と表現する。なんと高校2年生の時にJICAの「高校生懸賞作文」(現・国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト)で入賞した経験もあるという石森先生は、学生時代から国際問題に関心を持ち、途上国を訪れて回った。そして、世界と日本の子どもたちをつなげる仕事がしたいと教師の道を選んだという。

「生徒と一生涯続け、次世代を担う彼らに世界の問題や国際理解の素晴らしさを伝えていきたいと思ったんです」。これまでの赴任校でも国際理解教育を積極的に実施。前任校の宮城県小牛田農林高等学校に在籍中の2004年にはJICAの教師海外研修でモンゴルを訪問し、自らの目で見た開発をめぐる問題、国際協力の現場で活躍する日本人の姿などを伝えてきた。また、昨年には教師海外研修で知り合った教師仲間とともに、クワアチアへ行



グローバルシティズンシップの授業の一コマ。自分たちが普段食べているお菓子が、実はさまざまな地球規模の問題の原因に…。「授業でいろいろな問題を知り、大学で勉強したいことが見つかりました」と菱沼みゆさん

き、現地の教育関係者たちに自分たちが実践してきた開発教育を紹介するワークショップをした。

そんな石森先生が常に心掛けているのが、グローバルな教室づくりだ。多様性を尊重し違いを認め合うこと、環境に配慮しリサイクルや節電を心掛けること、仲間や家族を思いやること。授業中だけでなく学校生活すべてを通じて、グローバルなものを見方をはぐくんでいるのだ。

震災を通じて実感世界とのつながり

昨年には石森先生の発案で、英語科の